

今、比較思想を問う

末木文美士

一 草創期の比較思想

比較思想学会は一九七四年に創設され、二〇一三年に創立四〇周年記念大会を開催した。中村元会長をはじめとして、比較思想にかける当時の熱気と期待は、今日では考えられないほど大きいものがあつた。比較思想・比較哲学が方法的自覚を伴つて大きな問題とされたのは、川田熊太郎に始まる。川田はギリシア哲学の研究から出発したが、インド仏教文献へと進み、「諸哲学の哲学」として「比較哲学」を唱えるようになった¹⁾。

中村は、このような方法に学びながら、思想の比較類型学的方法を推し進め、一方で東洋の諸民族の思惟方法の相違を共時的に明らかにするとともに、他方で、世界の諸文化圏の思想に共通する発展を通時的に捉える世界思想史の構想を展開し、きわめてスケールの大きな比較思想の体系を完成させた²⁾。

初期の比較思想学会において活躍したメンバーとしては、玉城康四郎・三枝充恵・末木剛博・峰島旭雄などが挙げられる。玉城は瞑想論をベースとしながら、近代インド思想・ドイツ観念論などを読み込むことで、独自の世界を切り拓いた。三枝は自覚的に比較思想の方法論の確立を目指し、末木は、記号論理学の方法を用いて、東洋思想の合理性を説明した。峰島は、中村を助けて比較思想学会の基盤を固めた。このような初期の成果を集約するものが、『比較思想辞典』³⁾である。

比較思想学会が、東京を中心とした研究者を集めたのに対して、京都を中心として、いわゆる京都学派を継承する研究が、戦後も進められた。大御所的な位置に立ったのは西谷啓治であり、ハイデガーの翻訳に禅的な用語を取り入れた辻村公一、キリスト教の立場から仏教との比較研究を進めた滝澤克己、仏教の論理構造を説明しようとした山内得立、禅と神秘主義を中心

とした上田閑照などが輩出した。東京系の研究が、比較的客観的に思想の類型比較を行なったのに対して、京都系の研究は主体的な立場から宗教哲学的な考察を深めていったところに特徴がある。

比較思想的な研究は、一九七〇—八〇年代頃までは活気に満ちていたが、その後、停滞するようになった。もともと比較思想は、西洋哲学が絶対視される中で、東洋にもそれに対応する思想があるということを主張しようとするところに大きな動機があった。それ故、東西対抗という図式が根底にあり、東西の区画は明瞭であった。西洋と言っても、ドイツ・フランス・イギリスの近代哲学が典型とされ、それとの距離によって東洋を測るという形を取った。「東洋」として一括される中に、インド・中国・日本などが含まれることになる。基本的な概念構造のモデルは西洋に採られ、いわばその不十分なところを東洋によって補うことで、両者の相互理解が成り立つことになる。

その際、比較を行なう主体は、いわば西洋と東洋を同等に見較べる高みに立つことができるかのよう考えられ、主体の持つ制約に関しては十分な反省がなされなかった。いわば普遍性を持つ特殊な理性的空間において比較がなされ、そのような比較を進めることで、東西を融合させた普遍的な真理に到達し得るかのような樂觀的な展望が持たれた。

このような比較は、大枠的な見通しを立てるといふ点では、ある程度の有効性を持つが、次第に研究が細分化され、詳細に

議論を詰めていく段階になると、どれだけ学的な厳密さを持つて研究を蓄積していくことができるか、疑問視されるようになってきた。さらに、ポスト植民地的、ポスト近代的な状況の中で、固定的な東西対抗の図式が崩壊し、西洋近代の優位が揺らぐようになる、何を比較すればよいのか、不確かになる。思想・哲学の普遍性が疑問視され、そもそも比較が何を目的とするのかも曖昧となって、それが比較思想の衰退につながった。

もちろん、そのことはこのような草創期の古典的な比較思想の成果が無意味になるということではない。西洋の優位に疑問を突き付け、東洋思想が新しい目で発見される場所に比較思想が形成されたのであり、その成果は今日でも常に参照される価値が高い。ただ、それだけでは済まなくなつたところに、今日の問題がある。

二 新しい比較思想へ

世界の冷戦構造の崩壊に伴い、一九九〇年代以後、新たに比較思想が重要性を増す状況が生じてきた。「文明の衝突」という合言葉が政治戦略的な言説だとしても、民族紛争や国際的なテロの拡大、そして「帝国」アメリカの強引な「正義」の主張は、従来の枠組みの思想・哲学の無力を明らかにした。もはや西洋哲学の優位は完全に崩壊し、それとともに理性による普遍性への到達という目標は、ほとんど不可能であることが明らかになった。

そのような複雑な国際関係の中で、異なる文化・宗教・民族とどのように向き合うかという問題は、世界的に緊急の課題となった。かつてのような東西対抗の図式はあまりに単純で、現実に通用しない。異文化は他者としての理解不可能性を露わにし、しかし、それでもその理解不可能な他者としての異文化を適切に理解しなければ、相互の敵対性はますます高じるだけだという、きわめて困難な状況に直面することになった。日本の場合で言えば、西洋を理解する以前に、近隣の中国や韓国とも相互理解が成り立っていない。異文化としての中国や韓国をどのように理解したらよいのであろうか。それは、単に戦争や植民地という限定された問題に焦点を当てただけでは済まない。古典文化の時代から、東アジアの文化・思想がどのように相互に関係し、どのような相違を持ち、理解と誤解を生んできたかということをも、確認していく作業が不可欠となる。

そのことは、翻って自国の思想・文化をどのように理解するかという問題と直結する。これまで、日本の思想に関しても西洋哲学の概念によって理解しようとして、それがうまく当てはまらないと、「日本に哲学なし」と切って捨てるようなことが平然と行われてきた。だが、それは西洋哲学に該当するような「哲学」がないということに過ぎない。木田元が言うように、「哲学」が「西洋という文化圏の特定の時代に成立した特殊な知の様式」^⑤であるとすれば、それを普遍的なモデルとすることができないことは明らかである。それでは、西洋哲学をモデル

とせず、どのように日本や他地域の思想・哲学を見直し、それを新たに再構築できるであろうか。

もちろん西洋哲学をモデルにできないということは、西洋哲学を参照することを否定することにはならない。ただ、西洋を唯一の基準として、それに合せて他の文化圏の思想を評価することはできないということである。ステイーヴン・ブリック (Steven Brink) が「比較哲学の終焉」という言葉で意味しているのは、まさしくこのような状況である。オリエンタリズムや脱構築により西洋中心主義が無効となった後で、どのように新しい思想を構築していくことができるかということが、大きな課題となっている。

三 新しい比較思想のいくつかの例

二十一世紀に入ると、従来の素朴な東西対抗図式に替わり、新しい比較思想への動きが顕著に見られるようになってきた。筆者は先に、今日の欧米の新しい比較思想の動向をいくつか紹介したが、それらはこのような時代状況の中で展開してきたものである。その中でも、トマス・カスリス (Thomas Kasulis) による自己統合性 (Integrity) と他者親密性 (Intimacy) という思考類型の提示は、応用性の高いものであり、実際、エリン・マッカーシー (Erin McCarthy) によるケアの倫理への適用など、注目される成果を生んでいる。かつての欧米の日本哲学の研究は、一部の奇特な学者の変わった研究でしかなかったが、今日

では、西洋哲学に満足できない新しい研究者の意欲的な研究が盛んに行なわれるようになって¹⁰⁾いる。

日本においても、必ずしも比較思想と銘打たないものの、実際に新しい比較思想と称することのできる研究が続々と現れている。かつては「哲学」と言うと、西洋哲学の紹介的な研究に限られていたが、今日では日本やアジアの哲学を基盤とした創造性に富んだ研究が続出している。その先鞭を付けたのは、中島隆博であろう。人文系諸分野の気鋭の研究者が執筆する岩波書店のシリーズ「ヒューマニティーズ」に、中国哲学を専門とする中島が「哲学」を執筆したのは、象徴的なできごとであった。中島は、現代フランス、中国、日本などの思想を縦横に涉猟しながら、「哲学」を「複数の言語の間に成立する実践」として、「哲学者は一種の翻訳者だ¹¹⁾」と規定する。もちろん、その際の「翻訳」は、単に単語を置き換えるような機械的な作業ではなく、一つの文化をどのように異質の他の文化に移せるかという問題であり、それは、まさしく比較思想そのものと言いうことができる。

京都学派と新儒家を比較することの重要性は、中島の著作でも指摘されていたが、朝倉友海はこの問題を正面に据えながら、「東アジアに哲学なし」という言説（それはデリダによって増幅された）への反論を試みている。熊十力から牟宗三への新儒家の流れは、一方で西洋哲学の強大な影響下に立ちながら、他方でそれに対抗するのに仏教教理の枠組みを使い、それ

を儒学に転用していくという複雑な構造を取っている。それをどのように新たに生かしていけるかは、今後の課題に属するところが大きい。朝倉は、批判仏教などへも視線を向けながら、新儒家の一つの源泉となった天台円教の哲学に可能性を見ようとしている。そこにやや踏み込みの足りないところが見られるものの、従来のように、京都学派を絶対視するのではなく、それがある程度突き放しながら、東アジアの視座の中で捉え直していく作業は、今後の比較思想の大きな方向性を示すものと言える。

中島や朝倉は、「東アジア（日本）に哲学なし」とか「日本語は哲学に適さない」というような俗流の常識が成り立たないことをきわめて明瞭に証明したが、それでは、具体的に日本語で、日本の伝統的な思想を受け継ぎながら、どのように哲学を成り立たせることができるであろうか（もちろん日本だけでなく、中国や韓国も同じ課題に直面している）。その方向へ意欲的な一歩を進めたのが、竹内整一である。日本語の中でも、漢語がある程度抽象的な表現を可能にするのに対して、いわゆる「やまと言葉」は、抽象化しえず、もっとも「哲学」に不向きという言葉と考えられてきた。竹内は、かねてより「おのずから」と「みずから」の微妙な「あわい」に着目することで、日本思想の特徴を捉えようとしてきた¹²⁾。それをさらに進め、「ありがたい」「めでたい」「あう」「あいする」などの「やまと言葉」（実際には漢語由来の言葉を含む）を分析することで、西洋由来で

ない日本独自の「哲学」の可能性を導こうとしている⁽¹⁴⁾。必ずしも十分に成功しているわけではないが、少なくとも西洋的な概念を前提とせずに「哲学」が可能であることを示した点で、画期的な意味を持つものである。なお、私自身は、必ずしも「やまと言葉」にこだわらず、伝統的な日本の思想を基盤としながら、それを「哲学」として再構築しようという試みを続けている⁽¹⁵⁾が、それもこのような動向の中に位置づけられるものである。

ところで、必ずしも比較ということを直接のテーマとしない現代哲学の議論でも、比較思想に大きく関わってくるものがある。ここでは、そのような例として、ジャン＝リュック・マリオン (Jean-Luc Marion) とジャック・デリダ (Jacques Derrida) の論争を取り上げてみよう⁽¹⁶⁾。マリオンは、「現象学の神学的転回」と呼ばれる新しい哲学動向を代表し、カトリック神学と結びついた哲学を展開している。その中心となるのは「贈与」の概念である。「贈与」は現象学における「所与」の問題と関わりつつ、究極的には宗教へと向かい、神による啓示の問題となる。それに対して、デリダの批判は、贈与は結局のところ、それに対する見返りが生じ、交換という経済に帰着するのではないか、というものである。そこで、施者もなく、施物もなく、受者もないような純粋な贈与が可能か、という問いが立てられる。それが神による贈与＝啓示となる⁽¹⁷⁾。

デリダは、贈与の根源に「根拠なき根拠」としてのコーラ

(*chora*) を提示する。コーラは、もともとプラトンの『ティマイオス』に出るもので、デミウルゴスがアイデアに基づいて世界創造をする際に、それを受容する場に当る。デリダは「コーラプラトンの場」という専著でこの問題を扱い、「メタフォリカルな意味／本来的な意味という極性の彼方あるいは手前へコーラが赴くがゆえにこそ、コーラについての思考はミュトス／ロゴスという、おそらくは類同的な極性を超えてしまうのである⁽¹⁸⁾」と、あらゆる二元的な規定を超えて、把握できないものとしてしている。

究極の贈与＝啓示と究極の場としてのコーラという二つの志向は、この世界を超越していく一神教の方向と、この世界の内在的な根底を深化させていく方向という、二つの思考類型を示すものと言うことができる。後者は、西田哲学の「絶対無の場所」や、井筒俊彦の「東洋的神秘主義」などと通底し、インドや中国の思想、また大乘仏教にも類似的な思想を指摘することができるであろう。こう言うと、再び東西対抗図式に逆戻りするかのように思われるかもしれない。しかし、マリオンとデリダという現代哲学の先端的な議論の中で取り上げられた問題であり、東西対抗図式に還元できない、より根源的な思考の類型として考えなければならぬ。そう考えると、現代哲学の問題が、比較思想的な広がりや密接に関わっていることが分かってくる。今や現代哲学にとって、比較思想の方法は不可欠となっている。そのような地平から、新しい比較思想を立ち上げていか

なければならぬ。

- (1) 川田熊太郎『仏教と哲学』平楽寺書店、一九五七年、など。
- (2) 中村の比較思想に關しては、その著書『比較思想論』(岩波全書一九六〇年)に適切に全貌が要約されている。
- (3) 中村元監修・峰島旭雄編『比較思想事典』東京書籍、二〇〇〇年。
- (4) 他に、独自の日本文明論を展開した上山春平のような異質の哲学者も出てゐる。
- (5) 木田元『反哲学史』講談社学術文庫、二〇〇〇年、一二頁。
- (6) Steven Burk, *The End of Comparative Philosophy and the Task of Comparative Thinking: Heidegger, Derrida, and Daoism*, State University of New York Press, 2009.
- (7) 拙稿「比較思想学会四〇周年記念シンポジウム」比較思想の新たな射程「趣旨説明」『比較思想研究』四〇、二〇一四年。
- (8) Thomas Kasulis, *Integrity and Integrity: Philosophy and Cultural Differences*, University of Hawaii Press, 2002.
- (9) Erin McCarthy, *Ethics Embodied: Rethinking Selfhood through Continental, Japanese, and Feminist Philosophy*, Lexington Books, 2010.
- (10) 本号「学会動向」所収の拙稿「第十四回ヨーロッパ日本研究協会国際会議報告」参照。
- (11) 中島隆博『ヒューマニティーズ 哲学』岩波書店、二〇〇九年、三八頁。
- (12) 朝倉友海『「東アジアに哲学はない」のか』岩波書店、二〇一四年。
- (13) 竹内整一『「おのずから」と「みずから」』春秋社、二〇〇四年。
- (14) 竹内整一『やまと言葉で哲学する』春秋社、二〇一二年。その先蹤として、長谷川三千子『日本語の哲学へ』(ちくま新書、二〇一〇年)があるが、なお西洋哲学的な枠組みを脱していない。
- (15) 拙著『哲学の現場』トランスビュー、二〇一二年。
- (16) Jacques Derrida and Jean-Luc Marion, "On the Gift: A Discussion

between Jacques Derrida and Jean-Luc Marion," J. D. Caputo & M. J. Scanlon (ed.), *God, the Gift, and Postmodernism*, Indiana University Press, 1999. この論争に關しては、岩野卓司『贈与の哲学——ジャン・リュック・マリオンの思想』(明治大学出版会、二〇一四)に適切な紹介がある。

- (17) このことは仏教では三輪清浄に當り、必ずしも超越神を前提としない形でも成り立ちうる。
- (18) ジャック・デリダ『コーラ プラトンの場』守中高明訳、未來社、二〇〇四年、一六頁。

(すえき・ふみひこ、仏教学・日本思想史、
国際日本文化研究センター教授)